大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）大正十三年八月十日印刷　大正十三年八月十五日發行

川柳雜誌

第一卷　第七號

川柳雜誌　第一卷　第七號（大正十三年八月十五日發行）

目次

北陸の旅より……麻生路郎…（一）
暑中漫語……椙元紋太…（一七）
句作上の惱み……太田徹底郎…（二五）
川柳書架（四）……（三〇）
近作柳樽……路郎選…（三）
家出……森東魚選…（三〇）
麥酒……本田溪花坊選…（三一）
港……吉川啞人　武田芦穗　共選…（三三）
募集句
本社七月例會……（三一）
第一支部句會……二柳子記（三三）
遲日莊偶會……（三六）
第十二支部句會……花童子記…（三五）
かほる居偶會……（三六）
川柳塔……（三六）
啞人、洲馬、二柳子、零骨、輝翠、柳路、彩霞、かほる、莢豆、
助六、一洲、徹底郎、花童子
筏……（表紙畫自刻）……柴谷柴舟
編輯後記……（三〇）
誹風柳樽通釋を讀みて……森東魚…（六）

北陸の旅より

麻生路郎

驛頭に柳のあるもうれしき極みに候、尾張町に銀座食堂のあるなど、酒落氣横溢のところと愚察仕り候。主計町の趣味は解せずとも、流石に百萬石の城下、豈阿嬌に乏しからんやといふ感は抱き申候。（金澤の精養軒にて）

寢そべつて公園が見ゆ城が見ゆ

山中は俗なところに候へども、こほろぎ橋のほとりに、くらくなるまで酒くみ交はしたるこころよさは忘れ得ず候。

山中の蚊は鳴尾の蚊より猛烈にて、蚊帳の中にて蚊遣りを焚くありさま、全く想像の外に候。（山中溫泉にて）

だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこゝ

あはたゞしき旬行脚のことにて佳句に乏しく、たゞ記念にもと思ひ僅に二句を錄し申候。（八月）

近作柳樽

路郎選

剃刀をヘイ十錢と洒落て出し　神戸　紋太
西瓜一つ切つてしつかり食べ給へ　同
藝なしの番に藝者の口が過ぎ　同
欲しそうにいふその癖に働かず　同
杓で呑む水なんぼでもは入りさう　同
ちよこ借りた下駄恐縮の體で脱ぎ　同
ハモニカをたゞペコ〳〵と横に吹き　同
砂糖水箸一本で渦を巻き　同
暑い晩流し按摩を呼びましよか　同
目の前で丁稚づぼらを咄される　同
エプロンをかけると少女らしく見ゆ　同
女將もう金のないのを知つて居り　寸馬
巾廣い胸に心配して呉れる　同
別莊を覗くと犬が起きて來る　同
落籍された當座は親の事思ひ　同
灰吹を掃除しに來る旦那にて　同
牛乳屋一本出すにゐらい音　同
送り膳一人は傘をさしかける　同
生花の形其まゝ娘提げ　同
新參の女中手紙を書き通し　同
肥屋の方に言ひ分があり　大阪　松郎
安産に丁稚が出たり這入つたり　同
點呼から友達一人連れ戻り　同
話とぎれて簪を差しかへる　同
女關まで送つて元の裸なり　同
食客に來てる女の針仕事　同

行水に將棋の相手代はるなり　同　同
桶の音にも更けて居る終い風呂　同　同
ほり込んで喰ひつくまでの氣の長さ　同　小人
廓町もう少し年をとつて來い　同　同
勘定は一先親の手へ渡り　同　同
振り返つて見るほどでない女なり　同　同
交換手袴をとるといい娘　同　同
迷子は自分の名前だけは知り　同　同
氣に入りの一人みんなにいぢめられ　同　同
かくれんぼ脊の子供が聲を上げ　同　同
眞ツ直に歩むとすぐに衝き當り　朝鮮　是々坊
馬鹿になる呼吸を知らず馘になり　同　同
鮮童の喧嘩鼻血で兆がつき　同　同
此の恩は忘れませぬと行つたきり　同　同
半額の切符七つと云ひなさい　同　同
デッドボール痛いしぐさを見せゝ行き　同　同
もう産んだのか抱いて居る若い嫁　同　同
忙がしくかけ、ねじれるズボンつり　北海道　句樂
寢た振りを笑はせる氣の洒落をいひ　同　同
針箱へ醉つて戻つて躓づき　同　同
お隣の鷄を小聲で追ひ返し　同　同

仰山に泣かされて來る一人つ子　同　同
勉强の机へ邪魔な許嫁　同　同
しらべものらしい官衙の二階の灯　橫濱　三拍子
意見するつもり火入れを引き寄せる　同　同
そこのとこ片附けさせて客を上げ　同　同
洗濯を干す女房に沖は晴れ　同　同
やつちよる／＼と日曜に友が來る　同　同
醉つたとはもういけないのにはあらず　同　同
有るだけの力ですべる壜の口　北海道　二三吉
隧道を出て陽が向ふ側へ行き　同　同
輕便に乘りかへてから草疲れる　同　同
稽古三味また叱られるおなじとこ　同　同
誰か來さうな茶の間の湯がたぎり　同　同
縱結び笑つて姉に數へられ　同　同
灰買ひに鬼と組むよな奴は來ず　和歌山　久樂
夏物を着ると見ゐます肩の瘦　同　同
警察の傘も干してる裏長屋　同　同
測量の技師まで日向くさくなり　同　同
習字より太い文字にて宿の傘　同　同
失戀の從妹に逢ふ日來るなり　大阪　夢路
課長から見ゐる硝子が奇麗なり　同　同

女學生高らかにこそ唄ひけり　同同
艦船のこつちの岸の汚なくて　同同
善後策明日一番に乘るつもり　同同
混雜の中から妻を探し出し　同元山
連れられて心齋橋を二度わたり　同同
朝らしい音は乳屋の引く車　同同
何事もなくて其日の飯を食ひ　同同
そんなことがかなしくてまだ幸福だ　同同
その背の子供に用はないのなり　同玉出秋葉
念入れて書いた葉書が逆になり　同同
行く先をステツキで指す薩摩下駄　同同
エレベーター思はす嫁へすがるなり　同同
刈込の松から洩れる畜音機　同同
こゝづかりものが氣になる滿員車　同神戸琴月
這入らぬこいふておかしな人にされ　同同
思召あるかつくゞ眼鏡越し　同同
手荷物を驛夫なげねばならぬなり　同同
病人へ今日も同じ日があたり　同大阪竹榮
なまいきに仲にはいつてなぐられる　同同
氣のやすさ裏からちまきそつと呉れ　同同
年頃になつて袖口口にあし　同同

血液をさるのへ母はそつと立ち　神戸南耕
ちと早い大根を拔いて家を建て　同同
團體で來て說明が聞きされず　同同
有難いことに麥飯味があり　同同
今日が初めてですといふ鋏刈り　大阪柳骨
見送りにたつた一人の賴りなさ　同同
郡長は型のごとくに辭をのべる　同同
晝寢には風鈴少し高い音　同同
机たけ悲觀の譯を知つて居る　同双柳
バランルはおじぎのたびに斜にやり　同同
勉強は机買うたらするつもり　同同
橋詰の話まとまり相もなし　同同
新妻へがつかりした眞似をする　東京盜泉
暮れ切つてから夜遊びの夏羽織　同同
顧みて他をいふ式の男なり　同同
先生へ誰それさんが云ひました　同同
ごう見ても流球人といふ婆　神戸嶺月
かたちんばの下駄でお勝手までの用　同同
運轉手客の小言を知らぬふり　同同
石投げた深さ命をさる深さ　大阪凡平
道連にひろう小石の淋しすぎ　同同

財界の不況女房も知つて居る　同
干竿を尺蠖が走るこゝ　同
弱點を握つてものにしたくなり　同
明日の日が思ひやらるゝ灯をこもし　同
若旦那今日も白足袋はいて留守　同
値切られた符牒に首を傾げる　同
急停車事こそあれと窓をあけ　同
醴溫器少うし下げて見せる親　同
俺ならば喜んで行く婿の口　同
物貸した禮を氣安う受けながし　同
途中下車一人相談してまわり　同
仲人に弟一人かくされる　同
ひまを見ね巡査の文句長いこと　同
お名殘りを惜しむ握手と知れるなり　同
花電車屋臺の中も手を休め　同
脊の子を二人で起す花電車　同
兒の寢顔思はず針の手を休め　同
親切に云ふて呉れるはきらいなり　同
海水着お妾買ふただけのこと　大阪波郎
戀人へちと大膽なことを言ひ　同
質草を受け善所するよい女房　同

煩惱卽菩提と觀じ酒になり　同
下宿屋の留守を友達かきまはし　大阪千丁
執達吏罷り通ると言つた風　同
白靴は運轉臺に立ちたがり　同
來客に親父と鷄がちとあわて　同

一周年記念號（第二卷第一號）課題

記念號（大正十四年一月）計劃を逐號發表いたします。其の第一計劃として左の特別募集をいたします。

▼金庫（二十句以內）　吉川啞人選
▼松（同）　竹田蘆穗選
▼店先（同）　高橋古城山
▼弟（同）　柳川洲馬選
▼旅人（同）　龜井花童子選

句稿締切十一月二十五日限。各題の天位に川柳雜誌一箇年分、地位半ケ年分、人位三ケ月分を贈呈いたします。但し同一人で入賞した場合には高點の一方のみに賞品を送ります。

手を引いて唱歌で戻る女の子　同　彌生
晩酌をやめて淋しい箸をこり　平壤　美濃守
懷手足で座布團引きよせる　大阪　十呂坊
今日もまた隣こ犬のこゝでもめ　堺　夢六

誹風柳樽通釋を讀みて

――武笠山椒氏に――

森東魚

誹風柳樽通釋は近頃快ばしい著書である。私等が常に企しい居り乍ら今だに爲し遂げ得ざる勇氣のなかつたものである。此の點に於て著者武笠氏に先づ以て敬意を表さなければならない。殊に句其者を解剖的に說明するのでなく、何處までも句を味ふと云ふ意味合ひで、句の持つ情趣、卽ち詩としての價値に重きを置いて說明されてある事が何より私には嬉しい事に思ふ。然し八百句に近い說明中には多少私の異見のあるものが勿論ある。それで此の著を尊敬すればする程、私は敢て異見を發表して古句研究の參考に供したいと思ふのである。私の異見の中一つでもが武笠氏に對して、恰も淺瀨を敎ふる負ふた兒の手拭に比すべきものがあらば、私の滿足之れより大なものはない。順を逐つて異見をのべてみやう。

（五）ひよ〳〵の內はていしゆにねだりよい。

此の解に『餘り費用が嵩さないから、同じねだるにもねだりよい』とあるが、寧ろ幼兒に對する父親の好奇的の愛（特に初產の場合なぞの）にすがつて女親が、多小費用が掛り過ぎてもねだりよい、とかう私は解したいと思ふ。又『ひよ〳〵』を新婚當初と解したのもあつたと思ふが、他のさうした用例を知らないから賛同は出來兼ねる。

（四十九）借りのある家へ提灯紋盡し

借金のある家へ派手な提灯をつけて行くこの解であるが、それでは意味合が合點出來ぬ。私は古提灯を梅の花の形や丸や三角で穴ふさぎをして、如何にも御不勝手な有樣で借りのある家へはわさと行くこの意であらうと考へる。

（五二）なんの手か知れぬ夜更の硯ぶた

手を手段、計略と云ふ樣に解されてあた（沼波氏も確かさう

であつたと思ふ）之れは夜更けて女郎や新造が硯ぶたの殘りものをつまみ喰ひする所謂ゆびざうをやる場合だと思ふ。どうした手で摘み喰ひをする事やらと云ふ多少バレかゝつた戯談を云つた句だらうと思ふが如何であらうか。

（七八）飯焚に百ほどたのむとうふの湯

『豆腐をゆでたら其湯を捨てずに……』と頼むやうに解してあるが之は、豆腐を製造してゐる豆腐屋へ湯を買に行くやう頼んだと解する方がよろしからうと思ふ。

（九〇）けんぺいに投げ出して行質の足し

武笠氏は現代的に分りやすく解してあるが、どうも此の句の主人公は浪人ものか、道樂者の御家人などかに思はれる。句の味はひの『上五、中七』の工合からしてさう思はれる。單に質の置主が男であるとのみの説明では何となく不滿足である。

（九六）ぬけた歯に禿のこぞる片ッすみ

歯のぬけた主人公を花魁として解されてあるが、新造買ひの老人客の歯、或は入れ歯を落したのを禿が面白がつて見るのではなからうかと思ふが如何であらうか。

（九九）若後家のこすいでみんな貸なくし

若後家が貸しなくすと解されてあるが、私は若後家に、飛んだ氣のある連中か貸し失すとの意味ではないかと思ふ。

（一〇七）汐くみに所望の浪が打て來る

『丁度汲みによい樣に跳へ向の波が打寄せて來る、と嘲つたのである』とあるが、嘲つた意味合ひは少しもないと私は思ふ。寧ろさうした繪畫的場面を讃美してゐる句だと思ふ。

（一一三）御一門見ぬいたやうな錢遣ひ

大家の傾きかけた所っとあるが、御一門がそれではきかない。是は、平家一門の行末を見拔いたやうに、重盛は三千兩と云ふ大金を支那へ贈つて育王山に寄進したと歴史の事實を諧謔的に詠んだと解するのが本當であらう。『伊勢平の息子三千兩がどら』の類句であらう。

（一七二）寒念佛ころぶを見れば女也

『――腰卷などが見ゑたので『はゝア女だな』と説明されてあるが少し説明しすぎてあると思ふ。腰卷などは見ゑなくても、たゞ轉んだ姿だけで女と分つたと云ふ所に此の句の命があると思ふ、女らしい姿、轉んだ突差の間にも膝をすほめる樣な形を女はよくする――さうした姿だけで、はア女だなと分つた方が味ひが深いと思ふ。

（一七九）舞鶴に水をもらせる殿づくり

大厦高樓の棟の有樣を舞鶴と形容したと云ふ説明であるが、私は全く異なつた解を下して居た。それは嘗て『よのころ』誌上に發表したのであるが、それを再び記してみよう。

（上略）大工棟梁が水干か何かの出立で、水盛遣方を出す立

派な御殿の造營の場合であらうと思ふ。其水干か素袍かの裝ひで立働く樣を舞鶴に見立たのであろう、或は舞鶴の模樣で萬歳の裝の樣な衣裳を着て居たのかも知れない。

空色に舞鶴はよい模樣なり

と云ふのがある。これは多分萬歳の衣裳などと鎌倉の鶴を放した故事とを取り合せた句であらうと思ふ。兎に角舞鶴は棟梁の立働く樣を云つたものと解する。それには次の類句がある

白い鶴規矩準繩の上を舞（柳樽五九編）

これ等に依つて『殿造り』の句を左の如く解して良からう、と考へる。要する、に立派な御殿だ嘸かし工事着手の時には烏帽子素袍などで棟梁が水盛つた事であらう、さうなくてはならぬ晉請だと云ふ句である。尚、棟梁が儀式に烏帽子など着した事は棟上の句と考へられる次の如きものがある

烏帽子をしばし假に着て餅をなげ（下略）

と云ふ發表をして置いたのであるが如何であらうか御一考を願ふ。

（一九五）けいせいはとつばずしても恩にかけ

沼波氏と同樣、放屁と解して居られる。之は西原柳雨氏も『鯱鉾』誌上？に發表された通り『バレ』の句であると思ふ。私は老人連の馬鹿話の中に此の『はずす』と云ふ言葉を耳にして成程と此の句の解を密かに得た事があるが、柳雨氏の考證があつて更に明かになつたのである。

（二六三）見世さきへきつかけの有るうたが來る

手代が抜け出さうとする時恰も、身につまされる新内の流しなどが來たとの解であるが、惡友が唄を合圖に誘ひ出しに來　方ではなからうか。『楊貴妃の謠宵から二度通り』とか『さとられぬやうに謠で合圖なり』などと云ふ句がある。どうも此の類句と見る方が本當だらうと思ふ。

（二八七）猿廻し内へ戻つてあごを出し

猿を負つた頸筋の痛みを休める爲に、あごを出す――と解せられたが『よのころ』第二卷十二號に發表した通り柳樽十六編の

あごのない男が猿を脊負つて來る

を據の所として解すべきであらう。守貞漫稿に　猿曳は『古手巾をかむり』と云ふ明があるから、あごの邊まで手巾で包んで居たものと思ふ。譚左衛門部下から出たから當時は特に顔を成る可く包むやうにさしたのだらうと思はれる。であるから家へ歸つて初めて手巾をとつて、あごを出すのである。

（二九二）十分一取におろかな舌はなし

『十分一取』と讀まれてあるが、『取る』にと讀むのではなからうか、それで此の句は、先頃變態智識誌上に發表された通り百兩の持參金の十分一を取る、それが當時のお定まりの相場であつたので其周旋をする連中は皆辯口のたけた奴だと云ふ、限

つた意味に解した方が正しからうと思はれる。

（二九八）奥家老顔をしかめるものをふみ

奥女中達の茶目をした事に解されてあるが、私は矢張り芝居がかつた句で、何か戀文か何か拾つて、思ひ入れをきつかけに舞臺が廻るやうな場合の氣がする。之も以前手紙だ、いやさうぢやないと云ふ論があつたさうで安川久流美氏に云はせると又第三者の肩が凝る閑人の閑論だと叱られる事であらう。

（三九八）初ものが來ると持佛がちんと鳴

寺へ葬式が來る場合で、新佛を初物と云つた所が可笑しい、と解されてあるが、何うも考へ過ぎのやうである。持佛と云ひ、チンと云ふ所から考へても個人の家の佛檀としか思へない。初物、七十五日生きのびると云ふ位の珍味を貰つたから先づ兎も角佛樣へ供へる、チンと鐘を打つて供へると云ふだけの句であらう。『朴若折角やれば鈴を打ち』などと云ふ句もある。私の家などでは、魚類であらうが酒であらうが大抵珍らしい到來物は佛樣へ一度供へるから尙更此の句などは、直ちにさう感じられるのかも知れない。

（四〇三）内にかと言へばきのふの手を合せ

前夜一所に遊んだのを口走らぬやう、手を合せて合圖すると云ふ解で、沼波氏も同解で一般にさう解されてゐるやうであるが私は今だに疑問である。私は、貸金を取り立てに來た貸主へ、今日も又都合が出來ぬ云ふので、言分のすべもなく、只手を合はす、昨日通りの手を合はす、と云ふ樣な場合ではなからうかと思ふ。

（四〇五）四五人の親とは見ねぬ舞の袖

美しい神樂巫女、とあるが『舞の袖』と云ふ所からさう解されたのであらうが、矢張り例の橘町の踊子ではなからうか。

（四一四）赤とんぼ空を流るゝ龍田川

風に飛ぶ紅葉を赤とんぼと見立たとの解であるが、私は逆だと思ふ。赤とんぼが恰も群をなして棹の樣につゞいて空を流るゝ如く翔んで行く。地にありては唐紅に流るゝ龍田川の紅葉の趣である、空の龍田川の趣とも譬へたいと云ふ意味でかく詠まれたものと解釋すべきであらう。

（五二四）いたゞいて受けべき菓子を手妻にし

對間が客の前でする所作との解は、私も贊成する。私は尙一歩進んで葬式戻りの菓子、御供養の菓子を貰つた對間がやつたものとまで思ふ。『いたゞいて』がそれで利くと思ふ。

（五七四）吉原の鰐が見入れて紙が散り

よく分らぬとせられてある。此の句の解は、『よのころ』二卷九號へ輕口はるの山の中鰐の見入と云ふ落語の一節とうぐひす笛』中の『のり合舟』と云ふのから證例をあげて發表したのであるが、後者の例を再びこゝに記してみやう。

まん〳〵たる海中へのり出しけるに船すはりて後へも先へも行かず是はまさしく龍神の見入れたるなれば何なりとも海へ流してみるがよいと船頭の云ふにまかせ、みな〳〵紙一枚づゝ流しけるに（下略）

とあつて、前の例には鰐の見入と云ふ言葉があつて、矢張り紙なぎを流して先へ沈んだものが犧牲となつて乘合に代つて海中へ飛び込むのである。特に茲に記した例には、見入れとの捨て假名もついてゐるから、此の句の見入れも疑問にする處はない。そこで此の句意は、吉原で遣手や番間に紙花を出す、之は鰐に見入られたやうなもので、のづぴきならぬ事であると云ふ意であると私は解してゐる。

（五八八）見に行つてしめつぽく出る拂藏

濕氣でしめつぽくなると氣の毒さにしめつぽくなる精神的の方面もにほはしてあると思ふ。

（六二一）生ものをかゝへた婆アぶにんそう

箱人娘を番する母親に解されたが、婆アと云ふ點からして私は遣手と解してゐる。監督の任にある婆ア蓋し一分握る以外は不人相と相嘆がきまつてゐる。

（七〇七）死に切つて嬉しさうなる顏一ツ

『手におわない姑の死』となるが、私は『心中讃美』と解したい。それでは『死切つて』が變だと考へられやうが、死損じれば晒らされる當時である事を思へば死切つてが無理でなく寧ろ適切な措字であると考へられる。

（七四二）兩替屋のつぴきの無イ音をさせ

『金銀の目方ははかる音』と解されてあるが、贋造であるないの證據に板敷の上などへ叩きつけて、のつぴきのない音を聞き分ける場合であらう。

先つ一讀して氣の付いた所は、以上の如くである。私の誤りである所は大方の御教示にまつ事とする。尙追記八條を讀んで、

（三九八）の句解は私と同解であつたのに氣が付いた、私は書くおもがなの事であつた事を謝する。又、同時に（三四三）の句は靜丸氏の解は誤りであると思ふ。私は著者の解に贊成する

それに就ては先頃『よのころ』二卷七號へ書いて置いた御一讀をいたゞけば幸甚である。元來此の稿は先つ武笠氏の机下へお送りすべきが順であるが、序言の御主旨に甘へて敢て公表して諸先輩の批判をきいて、成るべく所謂駄勞解の少い通釋を得たいと思ふのであるから、失禮の段は武笠氏の御寛容を願つて筆を推く事とする。（大正一三、七、二〇稿）

麻生路郎氏著（柴谷柴舟氏畫）
漫畫漫文 川柳とこころ手 定價一圓廿錢 送料八錢
御注文（一割引）は本社代理部宛

本社七月例會

十九日夜
於端の坊

連日の酷暑にもめげず左の參會者あり十時半散會、路郎 日車 小鼓 蚊象 蟬翠 古城山 五葉 薫流 悠々 蚊十 津々 雅幽 梅風 駒人 蝶哉 幸堂 飛水 順三 しげる 竹榮 眠聲 黎明 百石 凡平 双柳 助六 柳骨 廣賀 刀三 かほる 馬行 波郎 松郎 光太樓 芦穂 溪花坊 二柳子 史風 文久 （出席者名簿より）

風（兼題） 路郎 選

風の出る事船長は知つて居り 二柳子
風上は風上だけの火事支度 幸堂
戀すれば夏の袂が飜り 小鼓
風のある方へ姉聟坐らされ 凡平
風少し出て來て海へ行つてる子 光太樓
安心といふ風上の灯のゆらぎ 津々
煽風機傳票一つ見失ひ 柳骨
風吹いて娘の足の遲れがち 史風
八ツ手には風はあるけど暑いなり 松郎
雨風に母は家出を思ひ出し 薫流
日章旗矢鱈に風を受けて居る 同
眞ッ白な道を通つた風が來る 徹底郎
電報が來たのは風のあつた晩 同
馬鹿らしく風の音聞く樂屋裏 芦穂
洋舘の横手思はぬ風があり 同
人間が死ぬ時風がはたと落ち 日車
藏の戸を開き先祖の風を受け 同
別れては袂にそよぐ風ばかり 蚊象
川向ひ絹行燈の風が見ゐ 同
薄ものの風を涼しく見て通り 同

人

いい風を〆切つてもう舊家寢る 悠々

地

出稼ぎに太平洋の風の音 古城山

天

灯の搖るるが風の姿なり 日車

戀人（席題） 松郎 選

戀人は僕の貧乏を知つて居り 眠聲
戀人が來て手紙が無駄になり 駒人
戀人の噂を輕く聞き流し 百石
戀人の弟と海水浴に行き 凡平
戀人のたつた一ト言聞き洩し 蚊象
戀人の短歌母親聞かされる 溪花坊
共譯とあるは戀人同志にて 馬行
戀人の事で新聞記者が來る 同
腑に落ちぬ事戀人は聞かされる 古城山
戀人と來て落ちつかぬ寶家 同

佳

大人の中に戀人それと見ゐ 蚊象
戀人へ結立ての髷斜に見せ 溪花坊
戀人を深すに遠く國を立ち 二柳子
戀人を待つに夜店の人通り 悠々
人込を拔けると女話しかけ

人

戀人と來たとは書かぬ旅便り 古城山

地

戀人の派手な着物が氣にかゝり しげる

天　選

戀人の腕に見ねぬ程の汗　松郎

○

戀人が藝者になつて誘ふ也　同

梅干（席題）　互選

梅干の腐つた麓も讓られる　悠々
梅干と紫蘇別々に干してあり　廣賀
梅干の前に親爺が生きてゐる　小皷
お粥さんに梅干なぎゝ醫者すゝめ　眠聲
里歸りして梅干を貰つて來　百石
梅干をやつて容體聞く隱居　凡平
新世帶ここわけ程の梅を漬け　竹榮
梅干の種はも一度口へ入れ　幸堂
食堂に梅干一つ落ちて居り　駒人
梅干も漬けて家内に恙なし　光太樓
朝膳に梅干つける古い宿　かほる
梅だけでよいわと母は念を押し　馬行
梅干の種裏山の方へ投げ　芦穂
梅干を敷布へ落す病上り　松郎
梅干が壹れたついでに水を撒き　蝶哉
梅干の箸を放して蚊を叩き　同
梅干の手鹽殘したまゝ仕舞　助六

はもちりへ梅干潰す割烹服　同

白靴（席題）　互選

白靴へここわりもなく水を撒き　芦穂
古顔の給仕白靴はいて來る　小皷
白靴は電車の隅へ立つて居る　蚊十
打ち水に白靴ちよつと汚される　柳骨
白靴で降りたところへ撒水車　眠聲
白靴はまたいだ跡をふりかへり　幸堂
水道の栓へ白靴手を伸ばし　蝶哉
白靴は遠くはなれた文化村　二柳子
白靴がまばらに交る人通り　輝翠
白靴へ飛び乘り輕く詫るなり　古城山
カフェーの夜白靴をふん延し　蚊象
塗立ての白靴履いて雨に逢ひ　刀三
白靴が空いた電車を待つて居る　同
白靴を汚されたまゝ乘りかへる　悠々
撒水の後を白靴飛んで行き　同
猿又のまゝで白靴掃除する　順三
白靴は踏まれた通り汚れてる　同
白靴で朝のブラット涼しすぎ　松郎
白靴で急用といふ姿なり　同

ハンモック（席題）　互選

ハンモック子守が乘つて叱られる　刀三
ハンモック搖れて居るとも兒は知らず　蚊十
洗濯の手で搖り寢かすハンモック　黎明
ハンモック兄さんこう〳〵寢てしまい　眠聲
ハンモック家内みんなで搖つてやり　百石
ちんちりが詩集に落ちるハンモック　蝶哉
ハンモック坊ン〳〵もっと搖さいひ　光太樓
ハンモック蚊が出て來たで降るなり　古城山
蚊帳つるとと邪魔かられてるハンモック　梅風
ハンモックコップに長く手を伸し　順三
ハンモック讀書する氣が寢てしまい　廣賀
ハンモック搖れて木の葉が少し落ち　駒人
ハンモック何時しか子供剛れちまい　薫流
無理云ふと大きく搖れるハンモック　凡平
ハンモック誰れか知らぬが押して呉れ　波郎
若い父ハンモックからよく歌ひ　津々
ハンモック下で針持つ女親　竹榮
ハンモック池の緋鯉は飛び上り　馬行
鉛筆をうつかり落すハンモック　同
ハンモック吊つて父親押へて見　助六

ハンモック父親の手で堅く締め　同
ハンモック蚊帳を吊るのにはづされる　雅幽
ハンモック吊るのに二人もめてゐる　同
兵児帶が又引ッかゝるハンモック　かほる
眼が覺めて少し淋しいハンモック　同
頻すりをしてハンモック遠ざかり　輝翠
ハンモック柱のあいに重く垂れ　同
ハモニカが巧く吹けたハンモック　松郎
ハンモック繪本と玩具だけで搖れ　同
何時の間に日陰が變るハンモック　蚊象
ハンモック糺の森の畫は閉ぢ　同
ハンモック女房の智惠と方で吊り　五葉
ハンモック矢張都會の中と知り　同
ハンモック女は足をかさねて居　芦穂
ハンモックまばらな枝の影がさし　同
初めての子にハンモック大きすぎ　同
ハンモック持つてて女のり　同
留守番が大きく吊つたハンモック　路郎
ハンモックこれが形見と思はれず　同
忘れられた樣に寢てゐるハンモック　同
ハンモックぬいそに乘せて泣き出され　同

第一支部句會

六月二十五日午後六時から大阪築港託兒所に支部句會を開きました。會場が電車から數町の所にも拘らず頗ぶる盛會でした。當夜溪花坊氏から、兼題芦穂選）の天位に短册の寄贈がありました、御厚意を謝します。參會者は左の通りです。（二柳子）

路郎、溪花坊、松郎、光太樓、蕉流、柳骨、双柳十字路、山月、助六、廣賀、秋葉、大頭、葛葉、蝶哉、黎明、眠聲、冷笑、駒人、かほる、刀三、古城山、雅幽、輝翠、芦穂、二柳子

日やけ（兼題）　芦穂選

自轉車で焦けたを息子苦にしてる　古城山
いつしかに日やけを厭ふ歳になり　路郎
日にやけた顏でビールをほめなり　かほる
日にやけて里子達者になって行き　松郎
公休日テニスコートの日に燒る　蝶哉
新學期日やけしたのがよく喋り　刀三
詰め襟を脱ぐと日やけの筋がたち　輝翠
眞黑にみんななつたと避暑便り　雅幽
藪入りの丁稚日やけをして歸り　光太樓
除隊兵日やけを帽子ぬいでみせ　同
（五答）日燒した顏吹殺を石にのせ　蝶哉
日にやけた方がつるはし高く上げ　眠聲
月曜日ボートで燒けた腕を見せ　松郎
子が一人出來て日やけを氣に止め　輝翠
母親の日やけは使ひあるきなり　溪花坊
（人）日やけして家出と戻って來　溪花坊
（地）お迎への家令日やけ驚かせ　刀三
（天）日に焦けた法を女中も知ったから　古城山

女將（席題）　松郎選

留守中に來た人女將氣にかゝり　助六
もう一度女將に柄を見て貰ひ　雅幽
智慧つけて置いて女將は座を外し　輝翠
三度目の電話に女將筆を置き　蝶哉
氣のもめる事を女將に打ち消され　大頭
自轉車へ女將は何んの耳か貸し　葛葉
女將又聖天さんの寄隆につき　芦穂
旦さんへ女將からチト叱ること　光太樓
他所行きに女將の口の輕い事　かほる
上品に見ゆる女將の肥り樣　同
兎も角も女將にまかす事になり　駒人
警察で女將いち〳〵譯を云ひ　同
長火鉢女將セッセと磨いてる　十字路

長煙管ポンとはたいた女將振り　同
(佳)遊ばしもるが巽見もする女將　路郎
月さんと女將甘ねるやうな聲　溪花坊
女將だけ分つたらしい笑ひ顔　葛葉
おかみさんの咳を雜魚寢の一人聞き　松郎

保險（席題）　古城山選

父親の生命保險をフト思ひ　雅幽
妹の仕度は保險金で出來　廣賀
保險屋がうつかり壽命の事申し　刀三
家主と共に保險屋勸めに來　駒人
吹殼を殘し保險屋やつと去に　十字路
警察の調べに保險ちと困り　溪花坊
女房には出ぎこの知れぬ保險金　黎明
あやしげな店で時計の保險證　路郎
勸誘員險査の模樣もいつて置き　双柳
共稼留易保險へ一人入り　芦穂
保險屋が名刺三枚置いて去に　光太樓
奥樣に逢ふて保險屋歸るなり　同
(佳)保險金知らぬ借金拂はされ　路郎
保險金あんまり時節待ち過ぎる　溪花坊
消防夫保險の有無に係はらず　松郎
(人)當てにする程に保險の嵩が無し　輝翠
(地)緣談の役にも立つと云ふ保險　柳骨
(天)保險金遂に若後家にして終ひ　双柳

○

保險屋の後姿を馬鹿にする　古城山選

海岸（席題）　互選

海岸に打上げられた胡瓜あり　双柳
海岸から旅館の屋根を高う見る　かほる
海岸の二人は夫婦でないらしい　冷笑
磯傳ひしぶきを浴びる面白さ　十字路
打ちよせた波か足跡つぶすなり　助六
海岸にボートが着けば二人なり　廣賀
此處なれば俺の病氣も治りさう　山月
氷屋も海岸だけは見逃さず　薫柳
海岸で犯人だけの召捕場　同
食パンが濟むと海岸歩いて來　路郎
別莊は波に浚はれさうにたち　同
海岸のお土產重い避暑歸り　雅幽
海岸で連れた子先の方へ行き　柳骨
海岸で素足になつた友に合ひ　二柳子
海岸で向ふの岸はぢこかいな　同
落膽はさびしい波の音を聞き　秋葉
トンチルを出れば海岸廣う見て　同
數を讀むやうに海岸歩くなり　光太樓
海岸を女の方も足袋をぬき　同
海岸へ西瓜の皮が上つてる　刀三
風船を海岸までは追つかける　輝翠
海岸へ只眞直に道路延び　同
海岸は今日大漁の灯をともし　眠聲
今一度海岸さがす事になり　同
海岸へ宿の女中が呼に來る　駒人
海岸を歩いて暴緒ぬらして來　同
海岸を尻むけに松伸びるなり　溪花坊
海岸へ下りる踏切一つ越し　同
海岸のゴミを別莊見て歸り　松郎
海岸に人形を立たすウキンドウ　同
海岸でみると別莊蚊帳を吊り　同
海岸で逢ふ約束をする涼み　芦穂
海岸へ早や一人出る男の子　同
海岸をあぶなく汽車の窓で見る　同

蚤（席題）　互選

出勤をさせてから妻蚤を取り　路郎

寢衣までぬいだが蚤は見當らず　駒人
蚤が氣になつて話はあさや先　廣賀
旅役者蚤の皺にいぢめられ　かほる
夕刊へ平手で蚤をおさへつけ　雅幽
蚤をさる猿・呑氣な人だかり　芦穂
今飛んだ蚤へ子供を寄せつけず　輝翠
姑がおむつ替へる蚤の跡　光太樓
蚤よりが邪魔して其夜眠られず　眠聲
掛布團蚤だんくさくらせる　大頭
朝の蚤ひさし指がおひかけ　蝶哉
うつかりと飛んだが蚤の最後なり　古城山
女房に氣付かれたのが蚤の不覺　松郎
蚤取つたことも知らずに寢てしまい　二柳子

第十二支部句例會

六月廿日午後六時半より、函館市末廣町東部事務所樓上に於て第四回例會を開く。出席者は茶化子、松々、八郎兵工、喜多坊、羽衣亭、田津尾、ばん蝶、紫仙、笑鯛、悪可樓、利喜馬、千波、一樹、潮三郎、鈍多苦、凡哲、東魚、二三吉、我樂、夢之助、花童子の廿一名。　同十時廿分散會。（花）

兼題（太鼓）　互選

飴賣りの太鼓へ肩の子がねだり　小嵐
手が觸るまでの太鼓は死んだ子　同
樂隊の始めは三つ程叩き　寒水
もう一度太鼓にさせて海勝を捨し　春江
飴賣りの太鼓買ひたいのも叩き　同
蹴轉がす太鼓の中に何か鳴り　ばん蝶
街外れから戻つてく觸太鼓　飛魂
笛のない太鼓淋しい馬鹿囃子　輕風
盆踊り樽の太鼓へ輪を造り　行々子
はね太鼓夜店を覗く氣に成れず　花童子
二つ三つ叩いて太鼓片付ける　松々
飴一つ賣れて太鼓が一寸止み　あづま
男の子だけ太鼓橋越ねたがり　同
旱魃を鐘や太鼓で雨を乞ひ　失名
小太鼓の撥小刻にはね返り　二三吉
大太鼓の後に小太鼓の音が殘り　修也
打つ者が替ると大鼓音が變り　田津尾
朝日の出櫓太鼓に迎へられ　鈍多苦
そのたんび太鼓途切れて飴が賣れ　行々子
氣持ちよく鳴る晴れた日の太鼓　喜多坊
ドロ・・・と鳴らせて舞臺凄くなり　夢之助
宮太鼓都の友をふと思ひ　吐根舎
日盛りに飴屋の太鼓眠たそう　純多苦
太鼓屋の太鼓は鳴りで値が違ひ　花童子
玩具箱からはみ出してゐる太鼓　喜多坊
音の悪い太鼓救世軍と知れ　純多苦
神易所化けて出そうに叩くなり　松々
買つて來た太鼓女關から叩き　八郎兵工

席題（ボンチ繪）　我樂選

仰向けに轉んだデブがまるくなり　ばん蝶
石盤へ書くボンチ繪へ子が集り　花童子
ボンチ繪へふとなめた指色がつき　一樹
半分ばゐ口になつてる顔を書き　ばん蝶

同（ボンチ繪）　笑鯛選

ボンチ繪へふとなめた指色がつき　一樹
ワイシャツとどらでボンチの父さんだ　田津尾
ボンチ繪を見て惡戯をし見られ氣　同

同（義太夫）　ばん蝶選

お淚ひに意外な人が出て語り　利喜馬
眞打は越路に似てる通を言ひ　花童子
勝將棋義太夫唸り〳〵せめ　八郎兵工

同（義太夫）　紫仙選

見臺を四五寸ずらす男弟子　夢之助
活動で寫眞と合ぬチョボを聞き　喜ッ塲

彈き語りそのまゝ白湯が冷めてゆき　二三吉
同　（停留所）　喜多坊選
廣告の椅子がはけてる停留所　茶化子
郊外のこゝでカンバス一人降り　潮三郎
二三臺止めて切符のけりがつき　東魚
ちこ込んで居て次ぎにする女連　夢之助
同　（停留所）　一樹選
二三臺止めて切符のけりがつき　東魚
五六人兵隊さんが醉つて乘り　潮三郎
込み入つた話し停留所で別れ　花童子

遲日莊偶會

國の親

木綿着で威張つてお呉れ國の親　莢豆
心配をきかして呉れた國の親　同
國の親送つて行つて聞くこゝと　同
よい嫁を持たせる筈の國の親　葭乃女
國の親西洋人を見て歸り　同
亦金のことを云び出す國の親　同
國の親嫁の生れを先づたづね　徹底郎
よく照れば照るとて國の親思ひ　同
國の親通天閣は止めにする　同
國の親近所へつらい姿で來る　同
歸ることばかり云つてる國の親　同

佳

子を連れて出たば去年のひまかる　葭乃女
井の中の蛙話の種がつき　徹底郎
ひきがへるごうなまれた坐つて居　同
雨蛙葉蘭の滑るこゝを知り　同
光明の雫にひたる雨蛙　莢豆
またさらにそこの蛙が聲をあけ　同
蛙まだ阿呆陀羅經の夜を更し　同
畦道の蛙一先づ尻を向け　同

雲

あの月に拗ねたか雲の斜に行き　葭乃女
雲もまた遠い果敢ないことばかり　莢豆
ほんに長旅だなこゝ雲思ひ　同
汽車の窓しばらく同じ雲が見ゐ　徹底郎
見つむれば反對に行く雲もあり　同

かほる居偶會

娘　――六月廿九日――

太つたお娘片輪のやうにいひ　路郎
次の間の娘が笑ふことが出來　同
郡から錦紗で戻る娘の子　二柳子
來客に次の間までの娘の子　同
黑朱子の襟が嫌ひな娘なり　かほる

本社九月句會

柳珍堂忌

日時　六日午後六時
場所　大阪市南區清水町停留所西入

柳翁忌

日時　二十三日午後六時
場所　同上

端の坊

兼題「空」　五句路郎選
會費　貳拾錢
兼題「年寄」　五句路郎選
會費　同　上

初心者の來會を歡迎いたします

暑中漫語

紋太生

◈まへがき

町の眞ン中にせゝこましく建てられた私の宅なぞは、終日カン〳〵と照り付けた暑さが日の暮れた後までも屋内に充滿してそれは堰止められたものゝ樣にぴりつとも動かない。家内の者は涼み臺へ皆出て仕舞ふ。留守居を引受けた形の私はその蒸されれる樣な暑さの中で寢轉び乍ら心靜かにこの文を書き始めた。それでも十時が鳴る頃には今まで部屋の隅々に潜んでゐた少し許りの涼しさが清水の湧き出る樣に私の周圍を巡る。私の筆は川柳に就て何かを書かうとしてゐる。撞球場のゲーム取の娘の聲も、支那うどんの笛の音も、近隣の人の涼み話も、皆他所ごさに聽き流して頭の中は川柳のことばかり。

◈恐れること

自分の句が人から評される時には可なりの興味を持つて耳を傾けることが出來る。然しそれも初めの間こそ、どんな批評でも聞いて見たいものだが、だん〳〵馴れるに從ふて、餘程の名批評でない限りは此方の自信の方がより強くなつて、テンで聞きたくも無くなる。遂にはその批評に對して逆批評を試みたい樣な氣持ちさへ起つて來る。私なぞはかなりさうした氣分に犯されてゐる方である。漫然とした批評や自己に偏した觀方をされた場合に、自己の句に反省を加へる心よりもその批評に對して反駁を加へたい氣分の方がずつと濃厚になつてゐる。若し夫れ自信のある句に對してゞもあつたなら一指をも加へさせないかも知れぬ。それほど心の驕つて來た私でばあるけれ共、只だ一つ人から指摘されることを恐れてゐる一事がある。それは、『お前はまだ人生の凝視めかたが足りない』と言はれることだその時こそどんなに私が自分の句を蒲團の下へ匿し損なつて顔

を緩めることかも知れない。

◆論議する者

川柳を論議する人が大分殖ゑて來た樣に思ふ。甲論乙駁、中々賑やかではあるが、その多くが川柳の本體その儘を明らさまに語つてはゐない樣に思はれる。自分の意見を少しも加へないで川柳その儘を分析提示したものは甚だ尠い。川柳を通じて自己を表現し合つて居るのではあゐまいか。通を好む者は通人藝術なりと解し、洒落を好む者は洒落文學なりと稱し、詩壇を眺むるものはこれを詩に致さうとする、新しきを求むるもの、古きを索ぬるもの、その何れに屬する者も自己の表現をしてゐるに過ぎないのであるまいか。川柳の間口は廣い。川柳を論議する者は自己の主張を押し進めると共に川柳ありの儘の姿を知ることも必要であらうと思ふ。私はこの點に就て古句研究に從事する人達に多くの感謝と尊敬を拂ふものである。

◆私の立場

私は川柳が如何なる使命を以て何う進むべきかを知つての後に川柳を始めたものではなかつた。先づ川柳を作ることを始めてから後に川柳の何であるかを考へ將來を慮るやうに育まれて來たのである。川柳を外側から眺めて評論しやうとするのでなくて川柳の內側にあつて川柳の呼吸に塗みれながらこれを如何にすべきかを考へねばならぬ位置に立つてゐる。川柳の缺點、短所を見出した時にこれを除去しやうとしてその方法を考へるけれ共、その缺點があるために川柳を見捨てやうとは思はない。川柳から遠く離れてこれを改造しやうとする者でなくて川柳にぴつたりと寄り添つたまゝでこれをより價値あるものに仕樣としてゐるのである。私が川柳趣味に搦みついて離れることの出來ないのは、一つはこの川柳の中から生れた者であるからである。

◆何故書くか

『君は川柳に關して何彼と文を書く容子だがよ、そんなに書く材料があるものだね』ここれは或人の問ひだが、それに對して私は答へた『いや、何だか知らぬが自然に思ひつくのさ、だから私の文には何の目的もないので、まあ自分の成長する樣を見るために痕を殘して置く樣なものだ、人から見れば馬鹿ゆた無駄骨かも知れない』と、そして頭の中で別なことを考へてゐる。

――營利を目的として始めた商人でも、これを押し進めて行くと遂にはいろ〳〵な理想とか主義とかゞ生まれて來る。例へば國家觀念のもとに自己の營業の大切なことを感ずるとか、國民衛生の上からこれに適合した食料品を製造仕樣とか人類愛の上から社會奉仕をしやうとか、いろ〳〵な尊い理想を持つ事が出來るものである。恁うした理想は現在利益を擧げることに狂奔してゐる商人やら、內職に營業してゐる無氣力な小商店には通用

せぬ理想である。

◆矛盾

川柳か滑稽を主要素として取扱はれてゐたれば、こそ私らのやうな滑稽好きな男がこれに携はる機縁が生じたのである。若し滑稽が主要素でなかつたなら私らは路傍の人であつたかも知れない。恁う思ふと私一個としては川柳の滑稽的氣分が有難いやうな氣がする。又川柳が卑近な題材を取扱うことを特徴とする爲めに一般文學から看て低級とされるなら、私はその低級さに對つて感謝してもよい。若し川柳が高級と稱される貴族的の文學であつたなら私は何うして今日の嬉しさを知ることが出來たであらうか。夫にも拘わらず私は川柳の滑稽的氣分を失はうとしてゐる。川柳の向上を叫んで高級なものに仕樣と試みてゐる私が川柳に感謝せねばならないことに就てはよく〳〵考へねばならないと思ふ。私の川柳觀には矛盾が多いので惱んでゐる。

◆句會觀

自分は句を作ることに非常な苦勞が要る。私は努力して、努力して句を作る。若し私が努力しなかつたら句の生れることはあるまい。この意味に於て私は句を作る機會に出會はすことを喜ぶものである。例會や小集は私に執つて大切なものである。題詠よし競詠よし、總て句會は私に熱を與へて呉れる大切な原動力である。人が皆走り出すときに私も一生懸命ついて走らうそして人が走り止めても、私だけはそのまゝ走ることを止めるまい。たゞひとり目的の無い疾走を續けてゐやう。この時が私には貴重な時である。そして私ひとりで自分のために句を作らう。その句は一句一句に私にまで懷かしい心持ちを味はして呉れるものでなければならない。句會が忌はしい遊戯氣分の漂ふたものであらうとも、句を生むために努力しなくてはならぬ私には大切な役目を果たして呉れるものである。況して句會が懷かしい人達に依つて營まれることは一層私には嬉しいものである。出來るだけ例會や小集には出席したいものと思つてゐる。

◆をはり

いつの間にやら手先にインキが浸んでゐることに氣がついたそれと同時に書かうとする心持に隙を生じた。私は筆を措く、家内の者はもう夙くに寢床を敷いて臥てゐる。私一人が暑さの中に動いてゐるものである。

▲山中より　路

山中溫泉にて一泊いたし候へども、かねて聞及び居り候シシとやらライオンとやらの怪物も一向に姿を見せ申ざずさては眼光爛々たる小生におそれをなしたるものか、將又財布の底を見透したるものなんめりと思ひ、高鼾にて熟睡いたし、翌早朝白靴の紐をひきしめ〳〵立ち去り申候

（同人諸兄へ）

募集句

家出

森東魚選

家出までしてもの女優志願なり　十呂坊
立志傳初手は家も出もした　男左馬
山一つ越して家出の夜は白み　助六
家出した心へ暗い雨が降り　元山
銀行へ行つたまんまの家出なり　山月
家出した譯を訊いてゐる口入屋　柳路
木賃宿家出同志のうまが合ひ　一聲
家出して死氣とは無く濱邊へ來　薫流
置手紙すぐ死ぬものゝ樣に書　三四四
家出して見れば世間の廣い事　凡平
出奔に愛の自由を書き遺し　默太
家出していつそ眞面目な二人也　光廣
保護願叱言の過ぎた愚痴も云ひ　乾坤
家出する嫁とは姑知らぬなり　零骨
叔父さんの家迄家出歸るなり　双柳
保護願ちやんと家出の先廻り　琴月
家出する氣を今知た臍を嚙み　是々坊
急行車家出に遲ひ思ひなり　夢六
狂言の家出と近所知つて居り　彌生
伯母さんの最後の智惠で家出をし　美濃守
支那語だけ土産に家出戻るなり　小人
家出して踏めば淋しい落葉なり　眠聲
出奔をした少年はおない年　盜泉
預かつた包み家出と後で知れ　秋葉
狂言の家出に困る雨が降り　一休
出て行けと言つて出られた慌てゝ　竹榮
保護願ひ里子のことも云ひ添へる　同
一稼ぎする氣汽車賃だけで出る　南耕
入智惠で兎も角家出でするこ極　同
盜人とおつつかつつに家を拔け　劍二郎
橋詰へ來ると家出の氣が變り　同
車屋も家出らしいを知つて乘せ　三拍子

川柳書架（四）

大正やなぎ樽

（矢野きん坊著）

▼例によつて凡例を轉載して見ると、

一本書の取材を廣く新聞雜誌等に掲載されたるものゝ内より秀句と思ふものを拔萃し置き、更に活字となつて現はれざる運座競吟中より選拔し加へたるものなり。

二本書は三百句毎に標題を附しあれ共別に意味あるものに非ず、讀者の便宜上區劃をなしたるものに過ぎず。

三句の配列は作句順に非ず、手帳に拔萃手記せる順なれば、或は前後し居るものもあるべけれど、句調内容に就ては差支なきものなり。

四本書は作句家の鑑賞を恣にせん目的を以て編みたるは勿論なれど、成るべく全く川柳を知らざる人にも面白く讀ませんがために編みたるものなれば

家出するあては都に伯父があり　同
こらしめに女房四五日身を隠し　句樂
面當の家出迎ひを待ちあぐみ　同
其後の噂を家出聞きたがり　蹕翠
保護願ひしたなど家出記事を讀む　同
駈落にいつそ女のいゝ度胸　古城山
家出する身に空想の多過ぎて　同
兩隣うす〳〵家出知つて居り　二三吉
家出したあとで娘の氣が分り　同
路銀には足らぬ覺悟の家出なり　同
暫らくは遊べる金を家出持ち　馬行
公園で家出と家出馴染む　なり同
町内に同じ日家出二人出來　同
許嫁家出のわけをちらと聞き　巨頭子
散髪屋家出の髯を知らず刈り　同

家出する娘同志に錢が無し　同
借金の事も家出は書き遺し　同
(人)出世して家出を酒の話にし　寸馬
(地)持つてるだけ持つて死ぬ氣のない家出　句樂
(天)面當の家出だん〳〵腹が減　一休
(追加)奥の手に家出と云ふ娘持ち　東魚
借りだけ借りる家出の下た心　同

選後に。矢張り同案類句が夥しくありました。自分の句を捨てゝなぜ同想の他の句を選に入れたかと云ふ疑や不平をお持ちになる方があるかもしれません。それは句法とか修辭とかに多少選者の見所があつての差別であり又選者が加筆した結果聲調が良くなつてのせたものもあります。又全く同等同樣な句で他の句の採錄數の多い爲に少ない人の方を擧げたものもあります。選に就いて質義があれはお問ひ合せ下さい。研究の價値ありと思ふものには、選者は出來るだけ研究的なお答を致す考で居ります。

麥酒

麥酒瓶振り上げたまで覺めて居　左馬
首と首縛つて麥酒壜斗がつき　一休
枯芒一人で麥酒飲んで居る　十呂坊
ウエトレスビールに醉て喋る　村夫

本田溪花坊選

中元の麥酒に母は不服なり　一路
進物の麥酒ドンと下ろされる　月の輪
注ぎ添へる麥酒仲居の赤い袖　凡平
泉水の影にビールの膳を向け　善風

種類を定めず、讀み行く儘に種々なる句風に逢着する事あるべし、之れ川柳普及の微衷に過ぎず。

五川柳の作り方、川柳の評釋等は逐次刊行する筈なれば本書には收めず。

六挿入し有る傳統研究は宗因の犬筑波集より時代を追つて拔萃したるものなれば、一面川柳變遷史料の參考ともなるべし。

七編者の不敏萬全を期せず、大方の示教を仰ぎ他日稿を改むるの機あるべし。

としてある。

▼卷末に附錄として『私の研究』といふのがある。その目次を列擧して見ると、川柳の沿革概要・進むべき川柳の道・遠慮しては駄目だ、前句附に就て、當込みと選者、新川柳に就ての數項である。

▼大正七年七月十五日發行。三五版三五〇頁。定價金七十五錢。發行所は東京市

ビール飲む脊へ團扇の輕い風　三四四
二次會はおごなしく麥酒で濟し　低能子
女房を笑ひ麥酒の泡を飲み　馬行
一息のジョッキに一座眼を睜り　乾坤
麥酒飲んで眞面目の男唄ひ出し　瀧草
交際の名義でビール飲んでゐる　双柳
ビール呑む片手ホークに觸るなり　眠聲
ビールからビールへ話し長くなり　黎明
暑いことビールの氷消ねて行き　少女櫻
立飲みは餘ッ程ビール好きと見ね　小人
兎も角もキリン一本買つて來る　彌生
蓄音機前にビールはよい機嫌　秋葉
ビール酌ぐ手つき女給は馴れたもの　夢六
これからはビールに限る祭の日　三拍子
冷藏庫ビール寢かして入れられ　琴月
麥酒壜だけもつてゐる紙屑屋　素人
貸浴衣ビールで醉て寢てしまい　久樂
あいそ書ビールをいつち先に書　竹榮
ビールで飲めぬと指した小鉢物　一洲
エブロンの手前ビールも少し飲　一柳
ビール瓶中へはさんで秘密會　一聲

初めからビールで醉たわけでな　元山
一杯のビール高價なものに成り　薫流
日支豆とビール買つてく二階借　山月
卓子へコツンと立てたビール瓶　輝翠
無理矢理に羽織脱がせて注ぐビール　松郎
ビールから少しはなれて賴信紙　同
氣の拔けたビールを出し塩末なり　波郎
突き出しへビールの泡チトはいり　同
忙がしい幹事ビールの氣が拔る　巨頭子
ビール樽コックが腰を置く所　同
飲み習ふビール中學二年生　盜泉
殿方はビールの泡を召しあがり　同
ビールなら呑んで見ろと里の母　柳骨
涼み舟ビールで少し景氣づけ　同
風鈴の下でビールの栓が飛び　零骨
衝立の蔭にビールの空が轉け　同
煽風機ビールに醉ふ頬を吹かせ　二三吉
麥酒箱小狹い土間で邪魔になり　同
ビールで飲む約束で湯屋を出る　是々坊
園遊會ビール流れる樣に注ぎ　同
かたぴらの膝へ麥酒の泡が超し　寸馬

四谷區舟町三六番地忠文堂書店である。
▼句數は隨分澤山採錄されてあるから初心者の參考にいゝ。

緣切寺

（五猫庵主人著）

▼鎌倉松ケ岡東慶寺を俗に緣切寺と云つた。古川柳にはたゞ松ケ岡と詠んで、この緣切寺をきかしてある。
▼本書にほ外骨氏の序文がある。こゝに轉載して見ると、『婦人が奴隷視された制度の時代に、特殊の保護法を有する緣切寺のあつた事は甚だ奇であり、これは政治と宗教との關係、人道と習慣との關係等、種々の事情が錯綜して其存在を容認されたのであらうが、之を日本婦人の逃避市と見て、先年來、法制家の碩學穗積重遠先生が雜誌に講演に屢松ケ岡の事を說かれたのを見聞したワタシは、例の好奇心に驅られて、一日重遠先生に會ひ、從來貴下が筆舌にされた事を一部の和裝本として發行したいとの旨を述べた

地下室へ下りてビールを飲み來る　同
ナフキンにくるまれたビール吸ひ込ませ　不越
生ビール置いてナイフが磨かれる　同
八月は兎に角ビールとつておき　劍二郎
煮やくつてる樣にビールついで呉れ　同
ビールで酒でもいける親爺なり　句樂

港

◇　啞人　選

住友の倉庫港の前に建ち　助六
自慢から五港の二つ附つて出る　一洲
地圖で見る港錨を一つ書き　一柳
港まで出迎ひに行く戀の文　一聲
港まで意見をきいて見送られ　元山
更けて行く港に殘る荷上唄　左馬
ちつぽけな湊裸體の子が騒ぎ　波郎
思案する姿錨を降ろす音　一休
雜音の中に汽笛を聞く港　村夫
船の醉港の風に甦り　月の輪
船が出て元の靜寂さに返り　同
くたぶれた樣に入港船の笛　凡平
煽風機ビールの泡を吹き崩し　同
注ぎこぼす麥酒にきつい皮肉也　古城山
待たされる儘にビールの泡を見る　同
(人)生ビール辻占散つて終ふなり　松郎
(地)此の舞臺ビールの麥酒呑んで居る　助六
(天)麥酒瓶拔き損ふた手を濕し　輝翠

吉川啞人
竹田蘆穂　共選

上陸の港で水兵醉つ拂ひ　善風
港から南京虫を背負つて來　三四四
港町點々灯つて昏黃れる　光廣
檢疫がちこ待ち遠い港口　乾坤
大股にゆくが港の姿なり　盜泉
乘客一人港の名を敎へ　駒人
義理の母港迄來て世辭を云ひ　雲川
乘込の海へ落した下駄一つ　双柳
雨の降る港の夜は靜かも也　眠聲
帆柱が急に集まる暴風模樣　小女櫻
鼻唄もきこえて港のよい月夜　同
泉水の樣に山から港見ゆ　少人
軍港地うつかりレンズ向られず　美濃守

が、あれは既に前約がある、改造社から發行する筈の離緣法の附錄として出す事になつて居るこの事であつた、それでワタシは聊か落膽したが、五猫庵主人と重遠先生との間に松ケ岡川柳に就てのイキサツがあつて、其仲介となつた機會に、ワタシは五猫庵主人に對して、法制上より見た緣切寺は見切らねばならぬ事になつたが、轉じて川柳より見た松ケ岡でも發行したいと早急に要望した、其要望によつて出來上つたのが本書である、五猫庵主人は辯護事務等の多用中であるに拘らず、僅か二週間許りの內に原稿をまとめて呉れたのである、外題を『緣切寺』としたのは無論此方のサカシラである。此由來を記して五猫庵主人がワタシの要望に應じて呉れた友誼を感謝すると共に世の古川柳研究家に對して、此『川柳松ケ岡』の如く、歷史、地誌、人倫、言語文藝等、何であれ、同一事の類句を蒐集して組織的に記述した專門書の著あらん

岬の高臺港へ光つて居る　秋葉
干潮にちこ棧橋が高すぎる　零骨
出港の間際で車夫は汗をふき　同
起重機の音荷揚場に風も無し　柳狂子
入港の明日がうれしい練習船　二三吉
港から港へ財布輕くなり　同
日沒の港奇麗にいろどられ　同
祝砲が港の町へひびくなり　琴月
出港の船へ自働車後れて來寸馬
おろされた錨港の底を知り不越
續く風今日も同じ船が居り　竹榮
海づらゐ寫つて搖れる港の灯　句樂
錨卷く音に駈落ほつとする　同
一太郎ヤアーと元氣を附けてや　山月
燈臺を越すと港の灯がともり　輝翠
凱旅に港俄に湧返り　同
(人)港まで送つて呉れた姉藝者　一聲
(地)着船の合圖港を遠く見る　左馬
(天)思ひ出の中の港の深い霧　盜泉
安直に女が呼べる港なり　啞人

◇　芦穂選

港の火見ゐて船暈ホットする　波郎
港街まだ一軒は起きてゐる　柳骨
着いたのか出るのか港騒がしい　黎明
船員の眼にも懐かし港の火　二三吉
吹き寄つた樣に港へ着く小船　一柳
港から見れば奇麗な異人館　三四四
燈臺は晝の港に淋しすぎ　零骨
港へ送られたのを忘れかね　輝翠
港から出るこありだ帆をあげる　句樂
出帆の鐘に最後の暇乞ひ　同
出迎ひの子を棧橋で抱あげる　同
突堤を出るこ小蒸汽搖れること　同
(五客)夕燒の港を鷗低く飛び　助六
この港バーでインコが啼いてる　盜泉
ドクトルが此處の港をきたなが　秋葉
思ひ出の中の港の深い霧　盜泉
船嘗める波に港の灯が搖れる　左馬
(人)大湊防備要地こ思はれず　雲川
(地)出帆の知らせに宿の熱い飯　句樂
(天)降り出した宵の湊の淋しすぎ　竹榮

事を望む、さすれば諸方面に渉つて趣味こ實益を賦與する事が甚大であらうこ信ずる』大正十二年八月十日　廢姓外骨こしてある。

▼大正十二年九月一日發行。菊版和裝二六頁。定價一圓三十錢。發行所は東京市下谷區上野櫻木町二十二番地、半狂堂。

▼古句研究家は必ず一讀せなければならぬ書である。

おことはり

第一卷　第六號　に發表すべき

「年增」　近藤飴ン坊選

右の選稿が第一卷第七號原稿締切後に着いたしました。選者が大變多忙であつたために發表が非常に遲れましたが近く掲載することにいたしますから不惡願ひます。

句になる迄　遲日壯主人

右は記事副湊のために休稿いたします。

句作上の惱み

太田徹底郎

行水を濟まして安物の浴衣りに兵兒帶を卷きつけ、花緒の細い直履で、夕方の西成大橋へ足を運ぶ。堤防へ上つただけでもう胸をはたける。脊中まで廻るだけの風がある。橋の袂へ來ると風の方へ向ひて、追分けでも張り上げて見たくなる。それが橋の中ほどの流れの眞上へ來ると襟をかき合はせねば、ものゝ十分と辛棒が出來ぬほどである。こんなことをいへば都會の眞ン中に住んで一寸外へ出てもコンクリートの間やアスファルトの上を歩いて居る人達などにはいかにも嘘らしく聞ゑるかも知れないが、上流遙に比叡の連峰が聳ゑ、下流はもう半道ほどで淀川といふ名が大阪灣に變り、書だつたらお向ひの淡路島か何かが風を一ぱいにはらんだ舟を挾んで見ゑて居るのだから、寒いと云つてもほんとうにしなくてはらないほど風の來る所に出來て居るのだ。今度阪神國道が改修されるのに就て橋の上には腰掛に恰好な板や丸太が運ばれてゐる。それに腰をおろしてゐると、何所からか尺八の音色が流れて來る。私はその時一人で來た淋しさを感じた。明日は姉の子を連れて來て唱歌でも聞かして貰ふか。いや〳〵明日は大阪の句會に行かなければならない義務があることを忘れて居た。實際時候のよいときには義務どころか案内狀が着くともうその日が待遠いほどだが、此頃の樣に暑い時分には畫の仕事よりも大儀な氣がする。あの建て詰つた都會の一間でいくら開け放しても土藏の壁や板圍では、涼しい風も來さうにない。汗を拭き〳〵句を作る苦痛と來たらこれでも趣味かと思はれる。明日は少し遲く行かう。そして兼題はこの涼しい所で作つて置かうと頭をまとめにかゝつた。どうしてもまとまらない『土用』といふ題である、土用は四季を通じて一回づゝはあるのだが夏の土用が先づ一般的であるから出題者の求むるところは暑い〳〵夏の土用であらうと獨り決めた、そこで土用、暑い、炎天、風がない風鈴、汗といふ樣な事が頭の中を走馬燈の樣に往來する。暑さの中で苦しんで居るつもりになつて、身動きもせずに居たがその走馬燈の中の一つを摑んで句にしかける、上五中七でどうやら暑さの句として普通のものなら出來さうだから下五で土用の暑さにしようとつとめた。眼をつぶつてみる、遠方の灯を見つめてみるそうして涼しい西成大橋で居る氣分を忘れてしもう、もう一息で土用の氣分が云ひ現はせさうになつたとき、一陣の涼しい風がさつと來た。そうなるともう涼しい橋の上の自分に返つて今までの努力はどこへやら消ゑて行く。それで今度は暑い方を見限つて暑い土用と涼しい橋とをくつゝけ樣とあせる。句にはなつたが到

川柳塔

○　吉岡啞人

靴をはき乍ら氣がつく棚の本
夕涼み口笛で行く若さなり
合宿所開けつぱなしで寢る所
ヘルメット色が變つて秋となり
對浴衣そこまでと云ふ歩き樣
子を抱いた涼みと聞いて待つてゐる
友達が代筆をする水枕
あの時が原因と知る病氣なり
オブラート呑まねばならぬ藥なり
復習を強ひる父親酒を呑み
小間物屋女にほしい素振なり

底物足らぬ。そんなことを何遍くり返して居つたが、つまりこんな涼しい所で暑さと密接な關係のある『土用』といふ樣な題詠は到庭出來ないものとあきらめた。そしてこう云ふ場合は『涼しい所と土用』といふ關係のみに限らないでどんな川柳を作る場合にでも『題と所』といふ樣な狹い意味でなしに作句する人の周圍の有形無形の物に支配されるものであることを知つた。そしてその支配に逆らふことの間違つて居ることさへも痛切に感じた。それと同時にプロレタリヤはプロ其ものゝ眞の叫びや見方を最も正直に表現してこそほんとうに力のある川柳が出來るものである。其の反對にプロがブルの境地の句を作つたり、ブル階級が自分の環境から飛びはなれた句を作つて見たりすることが一つの嘘僞であるといふことも分つて來た。そしてそれ等の句が實際に句主が其句意に現れた樣な境遇に居らないために未成品であることに氣がつ

氷屋は矢鱈に水をまいてゐる
厚化粧先夫へ濟まぬことは知り
騎馬巡査二階の襖見て通り

柳川洲馬

○

其内に職があるさと一つさし
口答へもう縫物はそつち除け
不拂ひは仲居の口で歸される
尼にでもなろかと夏の髪を解き
時間をば言つて朝市値切られる
蓄音機子供嫌ひな譜も交ぜり

橋本二柳子

○

鉢巻をしてまで力出したがり
塵拂ひだんだん店が狹くなり
漁船が海水場をさけて着き
氷屋は床几ばかりの店になり
涼み臺丁稚が來ると寢てしまひ
給金の少ない方が派手になり

酒井零骨

○

かなかつたり、盲目蛇の大膽によつて作られて居るため多くの場合不成功に終るのであることをも知つた。然しながら眞に自己現在の環境と獨特の個性とを表現しようとするとあまりに知り過ぎて居るためにどうしても滿足することの出來る句が生れて來ない。けれどもこの場合それを捨ててはいけない。つまり自分には何人にも知ることを許されてゐない物を持つて居ること、其の句が完成した場合は何人と雖も眞似ることさへ許されない權威ある句となるからである。川柳を作る人の誰もがこういふ考へで努力したなれば多くの先輩が聲をからして絶叫しつゝある彼岸への到達は決して六ケしいことでもなければ遠い將來でもないだらう私はいつの間にかこんなことを次から次へと考へてゐるのであつた。折柄阪神電車のけたゝましい汽笛を耳にしたのでふとあたりを見ることたいぶに遲くなつてゐた。私は靜に腰を上げた。生駒の山の向ふからはどんな月が出るのかほんのり赤くなつて居た。（一三、八、九）

それとなく守衛も笛の鳴るを待ち
蜘蛛が巣を張るに手頃な風が吹き
院長に逢ふ錢湯のこゝろよさ
表でまてご湯冷めのせぬ女房
叩き屋は原價に怖い程叩き
時々の駄賃に母の世辭を聞き
氣の引けるものを干してる小澤山
叱られて椅子は妹のものになり
兩足のしびれ故郷に遠からず
暗礁をはるかに知つたお手の内

森田輝翠

○

一坪にあまる毛皮の中に座し
勵まして呉れる言葉へ泣く日なり
投げられた程にキューピー傷がなし
笑はして呉れるな腹へ響くのだ
覗かれて湯上り膝の向きをかへ
靴穿いて出る父親の溫か味
抱車夫ちミカナリヤへ暇を入れ

暑中御見舞申上候

川柳雜誌社

阪神沿線鳴尾　麻生路郎
東京市芝區愛宕町一ノ一六大成社内　岩崎柳路
大阪市北區南同心町二丁目四五〇　原史風
大阪市西區八條通南小路　橋本二柳子
大阪市外南濱一八二　西垣松雨
函館市青柳町五〇番地　飛井花童子
大阪市西區八條通り北小路　吉川啞人
兵庫縣武庫郡西灘村河原五九〇　太田一聲
大阪市外稗島町本通り南五丁目　太田徹底郎
大阪市南區北炭屋町二〇二　高橋かほる
大阪市外中本町中道四〇二吉村方　高橋古城山

且さんの心を汲んで座りかへ
娘賣る日まで訊いてる高利貸
泣き止んで貰ふミルクの火をおこし

○　岩崎柳路

無條件の儘お妾に子が出來る
琵琶藝者丈け束髪がよく目立ち
流星をハッキリと見た涼み臺
タイピスト今日は浴衣の儘で來る
萬年筆臟品の樣に賣つて居り
月光を浴びて淋しい格納庫

○　武田彩霞

仲直りさせじ仲人暇乞ひ
終點に空の車がひとつあり
探ね人兎に角委細讀んで置き
燒跡の金庫嚴然として殘り
指先をなめてる中に蛋は逃げ
面會人歩哨の前に固くなり

大阪市西區八條通南小路北七
竹田芦穂
神戸市中山手通り二丁目九四
武田彩霞
兵庫縣武庫郡六甲苦樂園
黑木莢豆
吳市和庄通り四丁目二五〇ノ一
宗清夜調
山口縣山口町石原小路
柳川洲馬
大阪市外平野鄕町梅ヶ枝町五
松本助六
大阪市南區瓦屋町四番丁松村方
駒井籤作
兵庫縣武庫郡鳴尾
麻生葭乃
大阪府泉北郡濱寺町羽衣二六
酒井零骨
神戸市旭通二丁目八三
宮内一洲
大阪府下天下茶屋南下森三五〇
森田輝翠
大阪市西區鶴町四丁目一三嵐山方
闕本雅幽

○　高橋かほる

正直に生れ小役の藝に泣き
角張つた池が目につく夏芝居
本雨に毒婦と云ふが滑りかけ
本水に女形が出ると幕になり

○　黒木莢豆

一筋にみゝずの聲の悲しすぎ
そんな氣でぎこへ消ねてくシャボン玉
寄り添ふて思は同じをりの猿
ふと澄んだ氣持ちとんぼが舞つてゐる
蠅取器一つたゝけば革命歌
同情をしますて愚婦のくせにして
お月さん十六さゝけは泣き虫よ
親の代から人らしくないこゝに馴れ

○　松本助六

赤蛙喰べてる一人むす子なり
敷きのしをしたかたびらへ用が出來
子の寢顔哀れに見てる世帶痩せ

編輯後記

▼この頃の鳴尾は全國中等學校の野球仕合で大騒ぎです。甲子園グラウンドといふのは同じ鳴尾で社から西へ三丁ばかりの處です。臨時停留所が出來てゐます。編輯してゐる頭上を飛行機か十機も入亂れて飛んでゐます。逆轉横轉縱横無盡こゝもまるで繪本の空です。

▼七月三十一日の夜行で私と二柳子君が北陸の旅へ出ました。徹底郎君と古城山君が梅田の驛まで見送つて呉れました。金澤での歡迎句會は主催者側が近年にない盛會であると驚ゐてゐられた事程左樣に盛會でありました。句報は次號に載せることにいたしました。更に歡迎宴まで開いて下さつた金澤川柳家諸氏へあつく御禮を申上げます。

▼駒井簑作氏が入社いたしましたからお知らせいたします。同氏は神戸及須磨在住時代には『柳太刀』の前身『ツバメ』に、

雨宿り其塲のがれの世辭をいひ紹の羽織今日の電車にかしこまり隣りから見たことおかしい新世帶

宮内　一洲

○

するこ　ことがないので女給枯すゝきメガホンは親の居所聞ひてやり變窟と言はれうぬぼれ强くなり硯する片手間に讀む急がしさ

陽花の影に駒下駄腹を見せつまづいてから附添が後になり

太田徹底郎

○

客筋が知れて一旦三味を置き光明の僅かを持つて瞎につきカーテンへお客の無理を忘れに來蹂躙をされる藝者と見ゐぬなり挨拶は羽織を脱いでからのこと赤ン坊の裸ばかりも又困り流されるまゝに晴れたり曇つたり

東京へ歸つてからは『花束』に句を寄せてゐましたが今度大阪へ移り住むことになつたのです。

▼原史風氏が同人として復活することになりました。同氏が發行してゐる『千兩箱』は年一二回の不定期發行とし、川柳雜誌社系であることを標榜して出すことになりました。

▲小泉飛水氏は一身上の都合で退社されることになりました。しかし同人は退かれても支部會員となつて出來る限りの盡力はして下さることになつてゐます。第五支部の幹事は小泉飛水氏に代つて駒井簑作氏が引受けることになりました。小泉氏の同人復活の日を祈ります。

▼八月八日に二柳子居で午後一時から十一時までぶつ通しで同人小集をいたしました。顔を合はしたのが一聲、蘆穗、徹底郎、一洲、輝翠、かほる、莢豆、助六二柳子と私の十人であつた。句報は次號

▼八月九日に青明忌を營みました。神戸

アメリカハボートで航くといふ馬鹿さ
牛の眼が乾けば角は光るだろ
遠方で見れは物皆景にされ

龜井花童子

○

ぶらりつと出れば馴染の妓に出逢ひ
疊算ふと密豆の聲を聞き
投げ錢に思ひやり深い人にされ
借り物のカラーに首が締まるやう
月給を貰つて居ればこそ帳場
腹這へになつて水平線を見る
ハンモック雀と睨み合つて寢る
罐詰を切るに姑口を添ね
もう一度取替へに來るレコード屋
チト足らぬらしい男の申立て
玉子酒ほんのりとして姉歸り

石井竹馬氏選募集の課題『水枕』が前號で『氷枕』と誤植してあつたため『氷枕』を應募された方があります。甚だお氣の毒ですが更に一回分發表を延期しますから『水枕』で應募願ひます。（係）

からは青明の舊知相元紋太氏も出席されました、句報は次號に讓ります。

▼小田夢路氏の夫人が七月二十八日に亡くなられました。四人のお子さんを殘して逝かれたさうであります。亡くなられた夫人のためにも四人のお子さん達の上に幸福な日のあらんことをお祈りいたします。

▼井上劍花坊氏は信子さんからのお頼りによると仕事のために千葉縣の銚子にるられるさうです。

▼矢野きん坊氏は東京市芝區高輪車町八に居を移されました。

▼龜井花童子氏のお祖母樣が亡くなられました。茲に謹んでお悔み申上げます。

▼五號正誤
素見は原價を知つてるやうに云ひ　東洋鬼

▼六號正誤
電車賃もないとは無心哀れなり路郎
石垣へさつき泳ぎシャツを干し古城山

▼本號は私と二柳子君とが旅へ出たために發行が遲れました。次號で取戻します

▼本號は徹底郎君と私とで編輯しました（路）

暑中御見舞

和歌山市南汀町七番地	秋月明
	―久樂―
大阪府下東成郡鶴江村大字島	德田双柳
大阪南區玉屋町　高見方	高見柳骨
石川縣石川郡金石町字港町	俣田佐市
石川縣石川郡安原村打木	橋本牙羊

暑中御見舞申上候

環境寫眞

▼苦樂園の環境寫眞は從來の肖像寫眞に飽足らない人々の間に於て好評を得て居ります。

▼大阪、神戸、阪神電車、阪急電車沿線なれば隨所へ出張いたします。

▼可成前日迄に御申込み願ます。
（電話西宮一〇一番）

▼洋室と室内にて御寫しの折は雨天にても差支はありません。

▼背景にはピント外れになりますから戸外なれば三尺の空地でも面白く寫ります。

▼陽が照つて居りましても決して差支へない樣に研究が完成されて居ります。

▼苦樂園の環境寫眞は氣持の良い自然（御家庭其他）を背景としてうつす趣味深いものでございます。

六甲苦樂園寫眞部
兵庫縣武庫郡西宮北方

暑中御伺

原　史　風

大阪市北區南同心町二丁目
電話北三七五一番

暑中御見舞

大大阪川柳社

本田溪花坊

大阪市北區老松町三

電話北二四五八番

▼大阪一流の古本屋です。どんな本でもあります。
▼商賣にかけては掛引がありませんから安心です。
▼新刊でも割引して呉れます これは讀書家の便宜の爲。
▼主人公藤堂氏は本の蟲の心持をよく知つた人です。
▼だからいろんな話をしながら愉快に本が見られます。
▼道頓堀邊を御散歩のせつは是非立寄つてあげて下さい
——路郎生——

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

キリンビールの一杯は

人生を愉快にいたします

晩酌に宴會に御愛飲を！

東區平野町四丁目

明治屋大阪支店

早幕にビールをついだ好い娘　一秋坊

立飲みの荷物ビールに重た過ぎ　零骨

拍手の方へキリンビールの栓が飛び　同

乾杯の主はカップに取りまかれ　同

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第一卷第九號課題

八月二十七日締切

（各題二十句以内）

▲水枕　石井竹馬選

▲燕　白石維想樓選

▲半襟　柳川洲馬　竹田芦穢　共選

第一卷第十號課題

九月廿五日締切

（各題二十句以内）

▲日和　矢野きん坊選

▲坂　椙元紋太選

▲妾宅　吉川啞人　亀井花童子　共選

毎號募集

▲近作柳樽（句數無制限）　廐生路郎選

▲各地柳壇（會報）編輯　局選

▲文章（評論研究吟行浸文）

定價

一部　參拾錢（郵税共）

六部　壹圓六拾錢

十二部　參圓

廣告料

特等一頁　五圓

普通一頁　參拾圓

同半頁　貳拾圓

五號一行　壹圓

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます其の場合には御不在中でも頂けるやうに願ひます但集金郵便には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は審新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十三年八月十日印刷

大正十三年八月十五日發行

第一卷第七號

（毎月一回十五日發行）

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

編輯兼發行印刷人　廐生幸一郎

大阪市東區農人町二丁目七番地

印刷所　藤本兄弟社

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

發行所　川柳雜誌社

振替口座大阪三一五一四番

賣捌書店

（大阪）明文堂　エミヤ　波屋　百足屋　田村　公立社

（東京）東條（京都）三宅（神戸）米田

（金澤）石井（函館）石塚

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　原史風
橋本二柳子　西垣松雨
龜井花童子　吉川啞人
太田一聲　太田徹底郎
高橋かほる　高橋古城山
竹田蘆穂　武田彩霞
宗清夜調　黑木莢豆
柳川洲馬　松本助六
駒井簑作　麻生葭乃
酒井零骨　宮內一洲
森田輝翠　關本雅幽

支部所在地

第一支部　大阪市西區八條通南小路
幹事　橋本二柳子
第二支部　大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇
幹事　森田輝翠
第三支部　大阪市外濱寺町羽衣二六一
幹事　酒井零骨
第四支部　大阪市西區鷲町四丁目十三號地嵐山方
幹事　關本雅幽
第五支部　大阪市南區瓦屋町四番丁松村方
幹事　駒井簑作
第六支部　兵庫縣武庫郡西灘村河原東五九〇
幹事　太田一聲
第七支部　大阪市外南濱一八二
幹事　西垣松雨
第八支部　神戸市旭通二丁目八三
幹事　宮內一洲
第九支部　山口縣山口町石原小路
幹事　柳川洲馬
第十支部　神戸市中山手通二丁目九五
幹事　武田彩霞
第十一支部　東京芝區愛宕町一ノ一六大成社內
幹事　岩崎柳路
第十二支部　函館市青柳町五〇
幹事　龜井花童子
第十三支部　大阪市外平野鄉梅ヶ枝町五丁目
幹事　松本助六

本社幹事　蘆穂、葭乃（編輯）啞人、古城山（宣傳）二柳子（會計）一聲（廣告）莢豆（寫眞）

大阪十三年二月二日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大阪十三年八月十日印刷　大阪十三年八月十五日發行

羽車ソース卓上にあるは睦じさ

定價　三拾錢